



若いアイヌとして



奥さんのこのみさん、幸太郎君とともに

荒田 裕樹 (あらた ゆうき)

1985年（昭和60年）生まれ、北海道帯広市出身。イオル伝承者育成事業の二期生としてアイヌ文化を専門的に学んだ。帯広市教育委員会文化課アイヌ文化推進員、帯広アイヌ協会副会長、アイヌ・サニケ代表。

札幌大学ウレシパクラブに学生として所属していた際、「開発こうほう」の「アイヌ文化の振興、現在と未来」に、アイヌ文化に携わっている人たちにインタビューをしてそれを記事にしたいという依頼がありました。とても興味をひかれたので、卒業制作の一部として引き受け、4組の方々にお話を伺いました。8月号に引き続き2回目を紹介しますので、ぜひご覧ください。（竹内隼人）

荒田裕樹さんは帯広カムイトウウポポ保存会に所属し、アイヌ古式舞踊の伝承活動を担っているほか、アイヌ・サニケ（アイヌの子孫）というグループのメンバーとしても活躍しています。また、イオル伝承者育成事業[※]の二期生として研修を受けた経験もあります。

荒田さんは踊りがとても上手なうえ、舞台上で独特な雰囲気を作り出す力を持っています。今回は、アイヌ民族の踊りについて、さらにはアイヌ文化全般に対する考え方、伝承活動の現状についてお話を伺いました。

アイヌ文化に触れるきっかけと気持ちの変化

— アイヌ文化に触れたのはいつからですか。

荒田 俺の母親もアイヌ文化の活動をずっとやっていたから、保存会の練習について行っていたり。でも、子供の時に母さんが一回辞めて、俺も行かなくなった。それと俺の幼なじみの人がずっとアイヌ文化のことをやっていて、その人と仲良くしたかったから一緒にくっついて行っていたのが小学校低学年ぐらい。一応、保存会に入って踊りの練習はしていたけど、そんなに真面目にやっていたわけじゃなく遊びに行ってる感覚だった。“踊りを踊りたい”っていう気持ちはなかったんだよね。

真面目にやるようになったのは中学3年ぐらいの時。カナダに行って、先住民族と交流して、そこでカナダの同級生ぐらいの子たちが先住民族として胸を張って踊りまくっているのを見た。「わーっ！」と声を挙げながら踊るのを見て、すごく胸を打たれたっていうか。「…俺何やってんだろうな。同い年ぐらいなのに、こいつらすげえカッコいいな」って。俺もカナダに行って踊らなきゃいけないって一応練習はしていたんだけど、そんなに真

※ イオル（アイヌの伝統的生活空間）を利用してアイヌ文化に関する知識や技術を身につけさせ、人材（伝承者等）の育成を図る事業のこと。

面目でもなくて、なんとなく「恥ずかしいわ」っていう気持ちだったのに、ものすごかった。そこから気合入れて真面目に踊るようになりました。

いろいろな活動の形

— 荒田さんは、アイヌ・サニケ (sanike=子孫) の代表として活動しています。グループを新たに作ったきっかけや想いをお話してください。

荒田 実は、あまりサニケの代表という気持ちもないんだよね。そのやり方として、練習がつまらなくなったら終わり。だからみんな好きで集まって踊るのに、つまらなくなっちゃったことがあって、そうはなりたくないという気持ちがある。みんなすごく楽な感覚で、「あそこで公演するからこれぐらい練習しよう」と、切羽詰る気持ちでやることもない。だから、「やりたいです！」とは発信しないし、ただサニケというのがふわ〜とあるだけ。どこかで何かやるから「サニケを呼ぼうか」と簡単な気持ちで呼んでもらえる会にしたい。出ると決まったら一生懸命やるけれど、そんなにガチガチにしたらみんな嫌になる。

チームニカオア (nikaop = 木の実) というグループにもいたけれど、それとサニケが出来た時が同じぐらいなんだよね。ニカオアが大きくなりすぎて、何をやるにも「ニカオアお願いします」と。それはそれでいいんだけど、ちょうどそのころ、俺個人に「出てくれないか」と話があって、「じゃあ今回サニケで出ようか」と。



小学生にアイヌ文化を教える荒田さん

ニセコのイベントで、このみ (裕樹さんの奥さん) に声が掛かり、仲のいいやつに声を掛けることになった。呼ぶにあたってグループの名前が必要になって「子孫ということでサニケにしよう」と決めた。

— 自分たちで作って、やっていこうという形ではなかったんですね。

荒田 そう、仲間内で呼んでやろうというのが始まりだった。作ったきっかけはそこだよね。先に集まって「サニケやろうぜ」ではなかった。サニケはただ、楽しく、飲み会でもいいし。そこにサニケのメンバーがいたら、それはサニケの飲み会になる。どこかにみんなで行って勉強してもいいし、サークルみたいなもの。だからサニケがこれからどうしていきたいとか、かっこいいことは何もない (笑)。5年後も10年後もこのまんま。やる気があるのかないのか。二風谷で毎年夏のはじめに青年部が主催し「ウレクレク」(イベント名) があって、それに「サニケ毎年呼ぶわ」と言ってもらって。うちとアイヌアートプロジェクト (グループ名) が2年ぐらい続けて出てるね。面白いのは、その時に声を掛けて、出られたらサニケになる。最初のサニケのメンバーは6人だったけれど、二風谷のウレクレクに行く時、何人か都合が悪かった。このみと話して「帯広の踊れる人に声を掛けて一緒に行こうか」と、帯広から3人、札幌から3人で「サニケです」と出たんだよね。これからも「もし手が空いてたら頼むわ」となったら、もうサニケだから (笑)。

— 帯広カムイトウウポポ保存会についても聞かせてもらえますか。

荒田 やっぱり踊りは自慢だよね。シャクシャイン法要祭 (例年9月に新ひだか町静内で開催) や、まりも祭り (例年10月に釧路市阿寒湖畔で開催) に行ったら、いろんな地域の支部の踊りが見られる。いろいろ見て帯広の方が揃っているな、帯広の方が見せるものとしてレベルが高いなあとか。どんどん若いのが入ってきて踊っていて気持ちいいよね。俺らも若い世代だけど、その子供が

また入ってきている。それをずっとつないでいけばいいな。帯広は若いのがすごく多い。みんな楽しいから来るんだよね。日曜日の練習に、なんだかんだ言いつつ、ちゃんと来る。年一回の総会で、どこか温泉に泊まったりするし、たまに東京に呼ばれて踊ったり。みんなそういうのも楽しみなんだろうし、その時の一致団結感っていったらけっこうすごい。せっかく呼んでもらってるから、一生懸命いいもの見せようと。真面目だよ。踊りを見せるときは真面目にちゃんと見せて、終わった後の飲み会はみんなで楽しく、メリハリはあると思う。

— そういった楽しさはどうしたら生まれますか。

荒田 やっぱり子供たちは練習に行けば同い年ぐらいの子がいっぱいいて楽しい。家にいてゲームしているより、日曜日に行けばみんなで遊べる。サッカーしたり、バレーしたり、ボールで何かできるから。そういう楽しみがあるんだよ。それで、みんなで踊りもさせられるし、自ずとみんな踊りも覚える。いろんなところで踊るようになったら、踊った時の達成感を子供ながらに味わっていく。そしたら、「もっとうまくなりたい」「ここの手の叩き方をこうしたい」とか考えるようになっていく。入口は子供たちの集まりでいい。

— あとは来てくれて、子供たちが自然と踊りについて考えるようになっていく。

荒田 そうそう、来るだけでいい。そうやってレベルが上がっていくんだと思う。やっぱり古式舞踊でも、お金もらって見せることもあるから、それなりのレベルじゃないと失礼になる。阿寒や白老はプロだけど、保存会としてのレベルは帯広は結構高いなと思う。多分帯広は、白老や阿寒をライバル視している。ライバルになる必要もないけれど、すごくいいことだと思う。自分たちのレベルに自信があることだし、そういう心持ちはすごくいいと思う。男同士いま同世代で一緒にクリムセ (kurimse = 弓の舞) やエムシリムセ (emus rimse = 剣の舞) をやっている。4人もいると、お互いの良いところ、悪



エムシリムセ (剣の舞) を踊っている荒田さん

いところが見えてくる。すると自分のレベルも上げようと思う。いい意味で刺激し合えるから、帯広は良いよ。

アイヌのイメージについて

— 過去から受け継がれてきたものをどのような意識で、今の人たちに披露していますか。どのようにアイヌ文化を活かしていますか。

荒田 それは昔から自分のテーマでもあるんだよね、やっぱりアイヌということではじめられてきた過去もあるから。自分らの世代でそれを終わらせたいという気持ちがある。アイヌは、「カッコ悪くて毛深くて野蛮人だ」というイメージがまだあるから、はじめられるんだろうね。そういうのを無くすには、多分俺らが変わっていかないといけないんだよね。例えばね、俺がアイヌ踊りをかっこよく踊って、「あ、アイヌの踊りってかっこいいんだな」として少しでも思わせたら勝ちだと思う。そしたらそいつは、アイヌはまだ気持ち悪いと思っても、「でも、この間踊り見たらかっこよかった」となると、はじめも少しはしなくなると思うんだ。

踊りだけじゃなく普段の生活でも意識している部分がある。例えば俺がコンビニに行ってお釣りをもらった時に、「ありがとうございます」「袋大丈夫です」と言うよ

うな良いイメージ。店員さんは、少しでも横柄な態度とったら「え、なに？」と思っちゃう。それを逆手にとって、ちょっとでも礼儀正しかったら、店員は「あ、アイヌって真面目で礼儀正しい」と思う。そうしたら勝ちだと思うんだよね。

— 日頃のいろんなことからプラスの評価をつけていく。

荒田 そうそう。結構意識している。居酒屋でも「アイヌのお客さんが来て、すごく礼儀正しかったんだよね」と友達に話したとする。その二人は多分もうアイヌに対して悪いイメージはないと思う。俺らが辛かった思いを子供らにさせないためには、一人一人がやっていかないと。親が子供に言うから、子供も差別するんだよね。俺も今、親になっていくから、親同士でそういう感じでやっていかないと、子供たちがそういう同じ苦しみを味わうことになる。俺らを変えていかないといけない。だから、少し恥ずかしかったり面倒でも、そういうことから始めていかなきゃいけない。俺、コンビニですごく愛想いい人なんだよね（笑）。

今後のアイヌ文化

— 今後アイヌ文化をどうしていきたいですか。

荒田 4月に帯広に帰ってきて、8月いっぱいまで帯広市役所に勤めていた。9月から部が変わって生活館勤務になった。前はアイヌと何も関係ないところにいたけれど、異動になって学校教育指導室のアイヌ教育相談員になった。9月から環境がガラッと変わったから、大変な部分もある。新しいことばかりだから。帯広アイヌ協会の会員の子供たちが高校に通うのに、修学資金の手続きをやらなきゃならなくて、全然分からないことばかり。しかも、いきなりアイヌ協会の副会長になって。今の会長が、白老で3年間勉強してきた若者が帰ってくると聞いて、「これから若い者が協会を背負って立つんだから、ぜひその荒田裕樹君を副会長に任命したい」と。何十人もいる帯広アイヌ協会で、いきなり副会長になると、「誰だ?」「なぜいきなり20代の若者が副会長に?」と違

和感がある人はいると思う。けれど3年間勉強してきた自信もあるから。それが悪いとは言わないけど、帯広で普通に仕事していた人よりアイヌ語も分かっているつもりだし、アイヌ文化も勉強してきたつもり。会長の気持ちもちょっと嬉しかったから、「なぜお前が副会長なんだ?」と思っている人に、「荒田裕樹君にお願いしてよかったな」と思われるような副会長になりたい気持ちがある。見返してやろうじゃなく、そういう気持ちです。アイヌ文化をやっていくことは今までと一緒。踊るのも好きだし、木彫りも好きだし、帯広に帰ってきて白老で学んだことを分からない人や学びたいと思ってる人たちに教えていけたらいい。「あのアイヌ語は何?」、「この木彫り難しいな。じゃあちょっと裕樹に聞こう」となれるように。やりたくても教えてくれる人がいないというのがいっぱいある。そういう人たちに教えていきたいし、分からないことは一緒に調べていけばいい。3年間一生懸命勉強してきたことを帯広で伝えていければいいと思っている。

— 貴重なお話どうもありがとうございました。またいろんなお話を聞かせてください。

インタビュー日時2014年9月8日



インタビュー

竹内 隼人 (たけうち はやと)

1992年生まれ、北海道札幌市出身。幼少の頃に家族の影響で札幌ウポポ保存会でアイヌの踊りに親しむようになる。札幌大学文学部文化学科歴史文化コース卒業。在学中はウレシバ奨学生として札幌大学ウレシバクラブに所属。現在は白老町にある、(一財)アイヌ民族博物館の伝承課に勤務している。